

—あしら2人で  
日本の新しい文学を興そう—



# 子規・漱石 生誕150年

# 2人の足跡と功績

東京で出会い文学を語り、共に過ごした子規と漱石。2人はやがて日本の文学史に名を刻む偉人となります。そこで「出会い」「友情」「別れ」「功績」をキーワードに、2人の足跡を見つめていきます。



宝厳寺山門に腰掛ける子規(右)と漱石(松山市政広報テレビ特別番組より)



2人が住んだ愚陀佛庵



2人が観覧した「新栄座」

漱石は後に、その様子を次のように述べています。「僕は、隣に居る大將は下に居る。そのうち松山中の俳句を遣る門下生が集まって来る。僕が学校から帰って見ると、毎日のように多勢来て居る。僕は本を読むこともどうすることも出来ん。」(「正岡子規」より)しかしその後、漱石も一

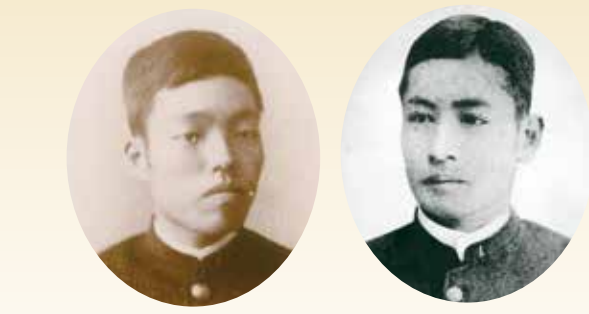
## 2人で散策

子規と漱石は一緒に周辺の散策にも出掛けました。道後温泉周辺を歩いて子規は俳句を作り、宝厳寺の山門に2人で腰を掛け、そこから広がる景色を眺めました。その後、漱石の提案で大街道にあった芝居小屋「新栄座」で当時流行した「照葉狂言」を観覧しています。柿の木じりまかれたる温泉哉

連日の句会  
子規が帰郷したという知らせは、柳原極堂ら松山に住む子規の俳句仲間にも伝わりました。極堂は子規に俳句を教えてほしいと頼み、子規は彼らの申し出を快諾、その後子規が暮らしていた1階には、極堂ら俳句結社「松風会」の仲間が連日のように押しかけました。

それぞれの道を行っていた2人に、再会の時が訪れました。そこは松山の「愚陀佛庵」。日本新聞社の従軍記者として清国(今の中国)へ赴いた子規は帰国後に入院。須磨での療養の後、漱石の松山での下宿「愚陀佛庵」に転がり込みます。子規が1階を使い、漱石は2階で過ごす共同生活が始まります。

## 友情 松山・愚陀佛庵での 共同生活(運命の52日間)



学生時代の子規(左)・漱石(右)

「彼と僕と交際し始めたのも一つの原因は二人で寄席の話をした時先生も大に寄席通をもって任じて居るところが僕も寄席の事を知ってみたいので話すに足るとでも思ったのであらう。其から大に近づいて来た。一方、子規は漱石に対し、英語に限らず、漢文にも抜群の才能があることに驚き「君は千万人中の一人なり」と褒めたたえました。以後2人は互いの才能を認め合い、生涯の友となります。明治22年、子規は大量に咯血、肺結核と診断され命の期限を悟ります。病と闘

## 出会い 寄席や文学を通じて知り合い 互いの才能を認め合う

子規と漱石が親しくなり始めたのは、2人が東京大学予備門に入学しておよそ4年後の明治22年。ある共通の趣味を通じて2人は意気投合します。

## 子規さんと漱石さんに力をもらった。 2人がおもしろがることをやってみせたい。



俳人・俳都松山大使 夏井 いつきさん

俳句で母親と妹を養い、自ら残した墓誌銘に月給を刻んだように、俳句を仕事にした子規さんの生き方は、同じ俳句を仕事に活動する私にとって、力になり、勇気づけられました。俳句の仕事をはじめた30年前子規さんが残した「たかこ」が朽ちてしまっているのではないかとこの危機感を抱き、「子規さんがおもしろがることを絶対やってみせたい」という思いが、私の俳句の種まき運動の力になりました。そんな中で、

子規さんと漱石さんが親友だったと知ったときは、驚きました。仲良しになりそうにない2人がどうして親友だったのか、それはきっと「ことば」という、シンパルかつ奥深いものが結んだに違いないと思います。私の活動の支えになりました。



時間内に句を作りあう「俳句対局」



宝厳寺山門前、松ヶ枝町の風景(明治末期)

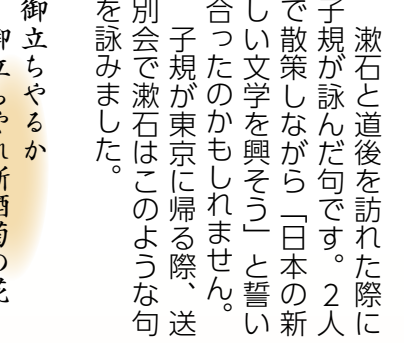


小説「坊っちゃん」原稿(複製)

「気を付けて出発なさい」という漱石の子規に対する惜別の情がにじんでいまふ。松山で文学を語り合った2人。その後、子規の俳句は柳原極堂らによって全国に広がり、漱石は熊本でも精力的に俳句を作りましました。運命の52日間で、2人は新たな日本文学の創造へと歩き始めます。

漱石と道後を訪れた際に子規が詠んだ句です。2人で散策しながら「日本の新しい文学を興そう」と誓い合ったのかも知れません。子規が東京に帰る際、送別会で漱石はこのような句を詠みました。

御立ちやるか  
御立ちやれ新酒菊の花



道後温泉本館、右手は養生湯(明治後期ごろ)

その後漱石は東京帝国大学を卒業、一方子規は帝国大学中退を決意し、日本新聞社に入社。それぞれの人生を歩み出します。

帰るふと泣かずには笑へ時鳥



2人が通った東京大学予備門

子規さんと漱石さんが親友だったと知ったときは、驚きました。仲良しになりそうにない2人がどうして親友だったのか、それはきっと「ことば」という、シンパルかつ奥深いものが結んだに違いないと思います。私の活動の支えになりました。

松山には、2人の思い、志言霊が今も生きています。子規さんは上京するとき「四国山猿が東京でおもしろいことをやる」と言ったように、私も松山で、子規さんがガラガラ笑っておもしろがり、「ワシも仲間に入れて」といつてもらえるようなことをやってみせたい、それが「俳句甲子園」や「俳句対局」の試みにつながったと思います。また子どもたちも多く参加する「句会ライブ」は、仲間との座学が好きだった子規さんや寄席好

きでユーモアあふれる漱石さんもきつと喜んでくれている、と思いつつながら毎回取り組んでいます。

これからも、2人の思いを大切に、日本中、世界中の人たちに「おもしろいこと」「俳都松山」でないと味わえない「俳都松山」でないと味わえない

## 再現映像で2人の足跡を紹介 松山市政広報テレビ特別番組

子規・漱石が過ごした愚陀佛庵での52日間で再現実況を交えて紹介した番組をウェブで配信中。(14分)



映像はこちら  
二次元コード

## 功績 新しい文学を切り開いた 2人が松山に残した足跡

筒袖や秋の棺にしたがはず  
漱石が子規の死を知ったとき、ロンドンで詠んだ追悼句です。「筒袖」は洋服を着た漱石自身を表したと思われまふ。漱石との再会を夢見ながら旅立った子規は、34年の生涯で俳句をはじめとする新しい文学を切り開き、その志は柳原極堂ら多くの仲間を受け継がれていきました。

## 別れ 病牀六尺とロンドン留学 2人の世界

漱石は熊本赴任後、文部省に命じられ2年間ロンドンに留学します。一方、子規は病状がさらに悪化したついで、東京根岸の「六尺の病牀」で果敢にその中で革新を進めます。その中で子規は漱石に手紙を送り「僕ハモーターメニナツッテシマツタ」と悩みや苦しみを打ち明けます。それ以前に漱石も子規に手紙を送って、異国での生活の様子を

事細かに記しています。それは短編小説ほどもある文量で、西洋を見たかった子規は大いに喜び、漱石の手紙が非常に面白かったこと、また手紙を送ってほしいことを切々と綴ります。互いに、生きて再会することはないと感じながら、



子規の顕彰に大きな功績を残した柳原極堂(1867-1957)



松山市立子規記念博物館 館長 竹田 美喜

子規が自身の俳論を「俳句は文学の一部なり」と始まる「俳諧大要」にまとめたのは、松山で漱石と過ごした52日間のことでした。「俳諧大要」は、子規が前後に作った俳論や歌論と比べ、文体が全く違い、近代的で傑出した構成となっています。それが漱石の存在が、そばで厳しい文学批評をし、そして励ましてくれた漱石の存在があったからではないかと思えます。



東京根岸・子規庵の子規(明治32年)

明治35年、子規は辞世の句を残し34歳の生涯を閉じました。

※一部の文章は、当時の資料などをそのまま表現しています